

第3章 現地調査結果

今回、全部で5つのフリースクールに見学へ行かせていただいた。5施設の見学を終えて共通して感じたことは、フリースクールの目指すものは、全て子どもたちが主体であるということだ。5つの施設を参観させていただき、それぞれの施設において独自に達成しようとしている教育機関としてのコンセプトと特徴を分析していきたい。そのために、本稿では各事業者から提出された調査報告書(参考資料 P64～P203)をもとに、現地調査結果から見えてきた現状について考察したい。

<現地調査結果の概要>

調査日	団体名(所在地)	現地調査の内容
令和6年11月11日(月)	一般社団法人YUME (木更津市)	プログラミング授業
令和6年11月12日(火)	NPO法人千葉こども家庭 支援センター(千葉市)	学習活動
令和6年11月15日(金)	S t u d y B a s e (茂原市)	テーマ学習(看板作り)
令和6年11月15日(金)	NPO法人COCO.NET (千葉市)	体験活動 個人別活動ポートフォリオ 作成 アプリの進捗状況
令和6年12月6日(金)	NPO法人F r e e I n t e r n a t i o n a l S c h o o l (船橋市)	体験活動(クリスマスの準備)

※現地調査の中で、全ての団体と意見交換を行った。

1 フリースクール等と学校との連携

どの施設も子どもたちの在籍校へ月末報告を行っていたが、その手法は様々であった。千葉こども家庭支援センターやS t u d y B a s e、F r e e I n t e r n a t i o n a l S c h o o l (以下「F I S」という。)では、毎日の子どもたちの出席状況および学習内容あるいは授業スケジュールの記録を月末にメールやタブレットで在籍校へ報告しているのに対し、COCO.NETやYUMEでは、それらに加え活動中の写真を在籍校へ共有していた。

これらの情報に基づいた学校の評価としては、千葉こども家庭支援センターでは在籍児童生徒の在籍校へアンケート調査を行い、学校側のニーズを確認したり、S t u d y B a s eのように児童生徒の在籍校への学校訪問をするなど、学校との連携を密に図り、学習内容の連動を試みる施設もあった。しかし、F I Sの報告書にあるように、フリー

スクールでの学習内容は、学習指導要領に則って指導が行われている学校においては評価が難しい側面もある。それを解消するためにも、YUMEで検討されている「エデュオプちば」(※)の活用には期待できよう。

それと関連して、「事業者概要」(参考資料P57～63 参照)に記された「主な活動内容」の選択肢として「㊦学習指導・進路相談」が設けられているため、項目に関する興味深い点を取り上げたい。5つの施設のいずれも「㊦学習支援・進路相談」を挙げていたが、その形態は様々で、日々の活動の中から学習指導要領の項目にあてはまるものを見つけて「学習指導」とする施設もあれば、学習指導要領の内容をもとに、学校で使用している教科書に沿ったプリント等を用いて学習指導をしている施設もあった。

現地を訪問した際も、日々の活動や体験の中から学習につながる視点を児童生徒に持たせていく「体験型学習」を重視し、活動の中心とする施設と、学校教育の中で行われる学習に準じた学習内容の支援を重視する施設では、同じ「フリースクール」といっても異なる印象を受けた。前者は文部科学省が掲げている「主体的・対話的で深い学び」に近いものといえるが、現代の学校現場においては、これまで日本の多くの学校で行われてきた教師主導の教育が主流となっており、「体験型学習」を行っている公立学校はそれほど多くない中で、公立学校の教員からすれば、「体験型学習」をどう評価するのかというジレンマがあることだろう。その裏付けとして、「体験型学習」を中心としている施設よりも、学校教育に類似した学習を支援している施設の方が、児童生徒の在籍校との連携がスムーズに取れているとの話があった。また、その背景として、事業の主体者が元教員の場合など、教育機関とのつながりを持っていると、学校関係者と連携を取りやすく、学校教育に倣った内容を実践しうることから、学校教育に準じた内容となることも容易に推測できる。

※千葉県教育委員会が令和6年6月から不登校児童生徒を対象に開始したオンライン授業配信の名称であり、開始当初は中学生を対象としていたが、令和7年度からその対象を小学校4年生から6年生まで拡大した。

2 フリースクール等と学校・教育委員会との協力による児童生徒の社会的自立に資する取組

どのフリースクールも子どもたちの社会的自立を目指した活動を取り入れていたが、その多くは体験活動であり、教育委員会に限らず、民間企業など外部の社会施設見学や行事の企画・開催、プレイリーダーの配置など、それぞれの施設独自の社会とのつながりを意識したものとなっていた。中には、COCO.NETのように、児童生徒の興味や

状況に合わせて学びの場の選択肢を広げるため、子どもたちの興味関心に合わせた教材選びを支援し、賞罰・評定も行わないことで強制せず、自ら学ぶ姿勢を育てることで社会的自立を促すケースもあった。

社会的自立と関連して「事業者概要」（参考資料 P57～63 参照）に記された「主な活動内容」の選択肢として「①対人スキル・生活スキルのトレーニング」、「⑦運動・創作活動・校外活動・食育」、「④児童生徒同士の交流（サロンなど）」に注目したい。これら 3 つの項目のうち、「⑦運動・創作活動・校外活動・食育」は全ての施設が活動内容として挙げており、各施設のホームページやパンフレットにもその特徴が紹介されることが多い印象である。また、訪問時に子どもたちの活動を参観することができ、いずれの場面でも子どもたちの表情が生き生きとしており、各施設の成果をうかがうことができた。

「①対人スキル・生活のスキルトレーニング」と「④児童生徒同士の交流（サロンなど）」は 5 つの施設のうち 4 つの施設が活動内容として挙げており、訪問時の活動の中でも子ども同士の和気あいあいとしたやりとりがみられる施設もあった。他方、この 2 つの項目を該当しないとした唯一の施設は千葉子ども家庭支援センターであったが、各自学習している子どもたちの様子は、前向きで生き生きとしており、突然の訪問者に対し興味を持つなど、社会的自立に欠けるとは言い難い様子であった。当該施設を訪問した際の「みんなで同じことをやることで対人スキルや生活スキルが上がる」、「学習により自信をつけて学校に復帰していく」、「勉強が一番のリハビリ」というお話が大変印象に残っているが、何をきっかけに社会的自立を図るか、というのはその施設や担当者により異なるようだ。

続いて、「⑤学校・家以外の居場所」について取り上げたい。5 つのフリースクールを見学し、職員の方のお話の中で保護者のニーズを伺ううちに、フリースクールの「居場所」という概念は、平日の日中に学校以外であっても何らかの教育機関に行くという意味で福祉的役割を指すのではないかと考えるようになった。その上で大変興味深いのが、唯一「⑤学校・家以外の居場所」を選択しなかった千葉子ども家庭支援センターでの活動であり、福祉の領域に当たる居場所については、教育とは分けて、その上で連携をすることが自然という考え方である。訪問者としては、どの施設も児童生徒たちへ「居場所」を提供している印象を持ったが、千葉子ども家庭支援センターは「居場所」を活動内容として記載していないながら「居場所」機能を果たしていた。このことから、他

の施設では進んで「④児童生徒同士の交流(サロンなど)」を意識して実施していることが推測される。

3 不登校児童生徒の教育ニーズとフリースクール等の現状に関する課題

具体的なアンケート項目については、第4章で述べられているため、ここでは報告書に記載された「現状に関する課題の分析」について考察したい。

千葉子ども家庭支援センターでは学習指導をメインに行っているため、子どもたちの回答から「勉強や困りごとが聞ける」や「勉強が分かるようになった」などの学習面に関する前向きな姿勢が見られることが報告され、高等学校への進学にも意欲を見せているようだが、一方で進学後の不安に関するケアは、課題であることが挙げられている。

他方、YUMEやStudy Base、COCO.NET、FISでは「自分のペースで学べる」、「学校より素の自分が出せるようになった」など活動面での満足度は高いものの、FIS以外の3施設では「将来の役に立つと感じている生徒は少ない」や「学習の遅れによる不安や罪悪感」など勉強に関する不安や、進路や将来に対する不安が見られることが課題として挙げられていた。特にCOCO.NETでは「学習については無理強いしない」ことを約束した上で、子どもたちが「不安なことは“勉強”」と答えたことは「学習というプレッシャーが絶えず頭の片隅にあること」を課題としている。類似して、FISでは子どもたちからは「楽しんで学びに向かうことができ、様々なことへの興味関心を深めていることがわかる」との報告があり、一人ひとりに合わせて独自の学び方を選択できることがフリースクールの良さであると言えるだろう。

4 不登校児童生徒の保護者のニーズに関する調査と課題の分析

前述3と同様の理由により、ここでは報告書に記載されている「現状に関する課題の分析」について考察したい。

全ての施設の報告書から、保護者も子どもも居場所ができたことへの満足感や子どもが精神的に安定したことへの満足感は共通して高いようだが、前述3でみられた子どもたちの意見と保護者の意見を比べると、多少なり満足度や不安点が異なるようだ。例えば、千葉子ども家庭支援センターでは、「進学への不安」は親子ともに同様に抱いている傾向があるようだが、保護者は子どもたち以上に「学校との連携」や「学校の代わりとなる学習(出席扱い)」についての満足度が高いと報告されている。

他方、YUMEやStudy Base、FISでは「学習面の遅れから復学や進学への不安を感じている」という点で保護者の不安は共通しており、Study Baseでは「学校とのやりとりの大変さ」や「家族以外との関わりが極端に減ってしまう」などの回答があった。そのほか、COCO.NETでは「保護者間の交流と情報共有」という点で「同じ立場で似たような悩みを抱えている保護者やスタッフの方と繋がれて、色々な話出来る」などの回答があった。また、FISでは子どもたちが「学校に通っていた時は、嫌いや苦手だと思っていた教科でも、FISでの勉強を通じて、好きになったり、得意だと感じたり、子どもたち自らが意欲的に学習に取り組む様子が報告されている」というように、学習に対して意欲的になるという意見が多い一方で、FISの学びと一般的な学びとの違いに不安を感じている保護者に対して、「勉強会へ参加していただく」ことで理解を得ていく旨が記載されている。

最後に、多くの施設に共通して課題となっていたのは、COCO.NETやFISの報告書で記載されている「スタッフの確保」、「外部講師の確保」、「交通手段の確保」に関連してみられる「経済的負担」であった。

各項目ごとに考察してきたが、それぞれの施設の特徴が活かされ、フリースクールと言っても、様々な取組をしている施設があることがうかがえた。それぞれの地域や通所する子どもや保護者のニーズに対応した上で生じる違いかもしれないが、それぞれの施設で抱える課題が異なっていることも明らかになった。よって、施設間での情報共有が今後の課題解消につながる事が推測される。